

【平成23年 5月 機動隊 男性警察官（40歳）】

「理解不能の被災地で」

「壊滅」というより、「何もかもなくなった」という表現の方が正しい気がした。
「焼けていない焼け野原」そんな印象もあった。

出発

3月11日14時46分、未曾有の大震災、東北地方太平洋沖地震が発生した。その約1時間後には、我々は秋田県広域緊急救援隊として出発していた。

信号減灯による渋滞やガソリンスタンドでは手動での給油、更に被災地近くになると道路が寸断され迂回を余儀なくされるなど、派遣先の大船渡警察署に到着したのは、翌日深夜1時30分になっていた。

到着後、真っ暗な会議室で署長に申告し、命令を受けた。

被災地入り

「陸前高田は壊滅状態。行方不明者・死者多数の様。任務は行方不明者の捜索。その他詳細は不明。」

これが署長からの説明であった。

加入電話、携帯電話及び警察電話は不通。無線はすでにバッテリーが切れ、公用車の大半が流されている状況では、把握のしようがない。

そして翌朝、捜索場所である三陸町越喜来地区に入った。

あるはずのものが無いということが、これ程違和感を感じるとは思わなかった。住宅は流されて基礎部分が見え、残った立木や鉄骨には、瓦礫が絡み合って山のように留まっている。高さ5メートルの堤防は倒され、崩れた積み木のように散らばっている。建物ごと流された柔道場の屋根には、軽自動車バランスよく乗っていた。

自分の目で見ても、この現実を頭が理解できない。「酷い」という言葉すら出て来なかった。

捜索

現地に入ってすぐ、住民に「こっちにもあります。」と声を掛けられた。遺体であった。まだ頭が理解できないうちにすでに任務は始まっていた。津波の直後は道路や瓦礫の中にもっと多数の遺体が横たわっていたらしい。

そしてその後の捜索は困難を極めた。瓦礫は津波の力によって圧縮され、漁港から流された網や切れた電線が複雑に絡み合っていた。思うように作業は進まず、気持ちだけが空回りしているような気がした。

捜索中、一人の青年が近付いてきた。連絡の取れない恋人を捜しているという。私は、「この辺では見ていない。」「避難所は丘の上にある。」そして最後に「もしかすれば中学校に居るかもしれません。」と答えた。

中学校は遺体安置所である。一番辛い瞬間だった。その青年は、日が暮れて私たちが撤収した後もずっと瓦礫の中を捜していた。

地域住民

住民から掛けられた言葉で一番多かったのが「来てくれてありがとうございます。」であった。私達にアメやお菓子を勧めてくれる人もいた。流通が崩壊し、貴重な食べ物のはずなのにである。警察車両に対して、歩道から深々と会釈する人もいた。

人は、自分が苦しい思いをするほど、優しくなれるのかもしれないと感じた。

帰県

3日間の捜索が終了し、任務解除となった。地震発生から3日目ようやく電気が回復した警察署に入り、副署長に申告をした。

「一旦帰ります。部隊を再編成してすぐ戻ります。」
帰りの車内では、岩手の無線から遺体発見や安置所の状況が絶え間なく流れている。隊員一同、「必ず戻る」と心の中で呟いた。

